



◎今号のトピック：輝く人

保健医療の国際協力で活躍するプロフェッショナル特集

今回の保健便りのテーマは「輝く人」と題し、保健医療の国際協力分野で活躍するさまざまな「人」へフォーカスしています。日本国内外、それぞれバックグラウンドを生かし、異なる場所で活躍する彼ら彼女らに、国際協力を志したキッカケや、忘れられないプロジェクト、現在の活動などを語っていただきました。

保健医療分野の専門家と聞くと、医師や看護師など、その道の資格を持ったプロフェッショナルばかりの印象をうけますが、本号に登場する人たちのように「元教師」、「ソーシャルワーカー」など、その間口は非常に広いです。国際協力分野への経験が比較的少ない若手には、今後のキャリアを考える一助として、経験豊富な方々には今後の活動の参考として、ぜひ楽しんでご一読下さい。



目次

◎今号のトピック：輝く人

- ◆ ～真のUHC実現を目指して～ 李 祥任 1
- ◆ ～元理数科教師 アフリカを救う～ 丹 みゆき 2
- ◆ ～全てを『忘れられない』プロジェクトに～ 清水 栄一 2
- ◆ ～国際協力の第一歩は、教えてもらうこと～ 鶴飼 和子 3
- ◆ ～プロジェクトの栄養は本気の愛情～ 力丸 徹 3
- ◆ グローバル展開事例のご紹介 4

～真のUHC実現を目指して～

李 祥任(り さんいん)

独立行政法人国際協力機構 人間開発部保健第三&第四チーム 特別嘱託

《プロフィール》

看護師として大学病院勤務後、国際保健協力の道を進む。  
東京生まれ、国際協力はタイ育ち、MPHはオーストラリア。



①保健医療分野の国際協力を志したきっかけ

中学時代の親友のお父様が、元JICA職員の地曳さんという方でした。私がお自宅にお邪魔させていただいた際には、地曳さんがよく開発途上国のお話しをしてくださりました。アフリカの青い空の下で子ども達に囲まれた地曳さんの写真を見せていただくなどして、うちに、私は将来、看護師として開発途上国の子ども達の健康のために従事したい、という夢を抱くようになりました。

②忘れられないプロジェクト(活動)

2012年に、初めてJICA本部で勤務を開始した時の担当案件に、これまでのキャリアでほぼ無縁だった農水産食品に関するプロジェクトが含まれていました。保健医療の経験がほとんど役立たず、想定外の事態に直面する度に悲鳴をあげながらも、多くの内外の関係者に支えていただきながら全力疾走する日々でした。



しかし、その後の私生活の中で、人から青果市場でのお仕事の話やエビの輸出入の話を知ることがあると、私はベトナムの農産品やエビの安全性を向上させる事業に関わった経験を誇らしげに語るようになっていました。安全な食品は、私達の健康を支える重要なものだと思います。

③現在の活動

現在は、タイとベトナムの案件を担当しています。特に現在、案件形成を進めているタイのUHCの案件は、日本からタイへの技術協力に加えて、日タイのパートナーシップにより参加国のUHCの発展を支援するものです。国境を越えての相互学習や取り組みが円滑に進むよう尽力していきますので、是非ご注目ください！

加えて、本部での勉強会の企画運営にも積極的に取り組んでいます。今年、保健グループと社会保障チームが初めて共同で「高齢化勉強会シリーズ」を開催し、日頃の業務の中でも情報共有や協働する機会が促進されています。

④今後の展望

私自身のもつ知見や力が最大に発揮できる事業や業務を通じて、グローバルヘルスのキャリアを歩み続けたいです。さらに、私のライフテーマである移住者の健康の観点からも、国籍や在留資格に関わらず全ての人々が必須医療を受けられる真のUHCの実現に取り組み続けたいです。



## ～元理数科教師 アフリカを救う～



### 丹 みゆき

独立行政法人国際協力機構 ガーナ事務所  
プロジェクト・コーディネーター

#### 《プロフィール》

大学卒業後、環境コンサルタントとして東京で3年間勤務。  
生きる実感を求めて、青年海外協力隊に参加。  
まず、ケニアで理数科教師として3年半活動し、再度協力隊のプログラム  
オフィサーとしてガーナに赴任。  
その後、JICAガーナ事務所に17年間勤務。

《活動写真》:技術協力プロジェクト「ギニア・ウォーム撲滅支援プロジェクト」にて、サーベイランス強化支援のために村のボランティアに活動用自転車を提供。

### ①保健医療分野の国際協力を志したきっかけ

青年海外協力隊員として、ケニアの地方のセカンダリースクールで理数科教師として活動していた当時、親しかった同僚の家族が急に病に倒れ、短期間に衰弱し、子供たちを残して亡くなってしまふ姿を目の当たりにしました。死の直前にHIVエイズに罹患していたことが分かりました。私は同僚と一緒に毎日、病院にお見舞いに行きましたが、ケニアの地方の医療事情では、ある日はマラリアと言われ、別の日には結核と診断され、マラリア治療薬と鎮痛剤を飲んで痛みを散らしながら何とか耐えつつも苦しんでいる様子でした。その姿を見て、アフリカで大切な母親の命がこうも簡単に目の前で消えてしまうことに衝撃を受け、自分が何も出来なかったことが悔やまれてなりません。医療の知識は無かったものの、アフリカの人々が健康に生きるために自分に出来ることが必ずあるはずだと思いました。

### ②忘れられないプロジェクト(活動)

私にとって忘れられないプロジェクトは、「ギニア・ウォーム撲滅支援プロジェクト」です。ガーナは以前、世界で二番目にギニア・ウォームの蔓延した国であった時代があり、西アフリカでは当該疾患が「ガーナ・ウォーム」と言われていた時代がありました。JICAでは罹患患者数が約7千件となっていた2004年に技術協力プロジェクトを開始し、ガーナ保健サービスの国家撲滅プログラムの活動を支援、サーベイランスの強化と啓発教育活動の促進を行いました。プロジェクト終了時には罹患患者数は501件となり、2011年の二次感染断絶宣言から3年が経過した2014年、WHOが国際認定評価チームをガーナに派遣し、サーベイランス体制が確立されていることを確認しました。翌2015年1月、ガーナにおいて「ギニアウォームの発生がない状況」であることをWHOが認定し、それを受けてガーナ保健省は2月、撲滅宣言を出しました。長年に亘る当国保健省の地道な努力が実を結んだ結果であり、JICAの支援が着実な成果を挙げた例として最も心に残る担当案件でした。

### ③現在の活動

現在は野口記念医学研究所支援やエボラ対策等の主に感染症対策案件を担当しております。特に新規に当国で開始するSATREPS事業では基礎研究での成果を当国の感染症対策に生かすために、サーベイランス体制構築支援も実施の予定で、上記プロジェクトで強化したコミュニティサーベイランスの枠組みを活用することから、一貫した協力に携わっていることに喜びとやりがいを感じます。

### ④今後の展望

今後も途上国の人々が健康に生活することが出来るようこの道での活動を続けたいと思います。

## ～全てを『忘れられない』プロジェクトに～

### 清水 栄一

スーダン個別専門家 PHC政策アドバイザー

#### 《プロフィール》

精神科ソーシャルワーカーとして病院勤務後、青年海外協力隊参加(タンザニア)。  
ユニセフ(ナミビア)、GAVI(ジュネーブ)、JICAケニア事務所を経て、現職。



### 国際協力を志したきっかけ:

青年海外協力隊に参加しタンザニアに赴任した。国際協力の仕事人と接し、「いつかは自分もJICA専門家に」と憧れた。夢が叶うまでに15年の歳月が流れていた。

### 忘れられないプロジェクト:

2006年、ナミビアでポリオアウトブレイクが発生した。政府は全国民へ緊急予防接種実施を決定。日本の2倍の国土に200万人しかいない。ユニセフでモニタリング主任だった私はランクルで村から村へと日々走り回った。2度に渡る緊急キャンペーンは接種率100%で無事終了した。我が愛娘も、当時のユニセフ所長に抱かれてポリオ接種を受けたことは忘れられない。



もう一つ。お金の話。債券を発行し国際金融市場から予防接種のために資金を調達する仕組みがある。その債券を「ワクテン債」と呼ぶ。GAVIにいた私は、世銀や証券会社など畑違いの人間達と日本市場からの資金調達に挑んだ。目標額200億円！結果は一週間で完売を達成した。その後も日本市場では6回の起債を行い、計1300億円をGAVIに調達した。ビジネスクラスで国から国へと飛び回っていたバブリーな時代は忘れられない。

### 現在の活動:

PHC政策アドバイザーとしてスーダン連邦保健省にいる。ここは何かの修行だろうか。前に進む困難さは過去に経験してきたレベルを遥かに超える。国内問題は山積み。紛争、経済制裁、人材流出、きりが無い。汚職、民間投資ランキングはソマリアと並ぶ国。その中央に身を置く。当局が監視し自由な言動・移動も許されない。立ち足る壁の材料はいくらでもある。ただ、自分を助けてくれるのも彼らと信じ、志高く孤軍奮闘している。おそらく、ここも忘れられない地になることだろう。

### 今後の展望:

「人を助ける仕事」を続けたい。人生万事塞翁が馬。人生は死ぬまでの暇つぶし(笑)。家族や仲間を笑顔にし、あとは任運任天(人生における判断は運や天に任せること)で、与えられた仕事を楽しまたい。

## ～国際協力の第一歩は、教えてもらうこと～



### 亀飼 和子

青年海外協力隊 26年度1次隊(ラオス・看護師)

#### 《プロフィール》

大学卒業後、4年間手術室業務に携わった後、青年海外協力隊に応募。  
現在、ラオスのカムアン県病院にて活動中。メコン川に日々癒される29歳。

「広い世界の中で、たまたま日本という国に生まれた。ゆえに飢餓や戦争におびえることなく生きることができる。ただ、世界にはそうでない人がまだたくさんいる。この現実に対して私に少しでもできることがあるのではないか？」そんな思いが、小学生の私に芽生え始めました。世界中の人々が安心して暮らせる、そんな世界になればいいなと考えたことが、私が国際協力を目指した原点です。

現在の活動場所は、カムアン県病院手術室で、手術室環境の改善や看護師に対する業務指導を主な活動内容としています。活動当初は、その清潔レベルの低さに驚くと共にまずは言葉の学習から始まりました。まずは、ここの看護師と同じように仕事ができるようになろうと決めました。なぜなら、彼らの行っている業務を実際に自分も行うことで、日本との違いを肌で感じ、なぜその方法でやっているのかという理由を知りたかったからです。また、今後の活動を進めるうえで彼らとの関係性をつくるのが大切だと思ったからです。そのため、当初は彼らから教えてもらう毎日で、まるで社会人1年目の頃に戻ったような気さえしました。

それから仕事にも慣れてきて、ここの状況を自分なりに把握し、様々な課題がある中で何からアプローチすればよいかをスタッフと話し合っ決めてきました。まず取り組んだことは環境改善のための5Sです。日本で働いてきた手術室は、すでに整頓されて働きやすい環境でそれをあたりまえのように感じていましたが、自分で実際に5S活動を実行するのはこれが初めてです。手術室改造計画をたて、主にゾーニング、倉庫の物品の整理、物品のラベリングなどをスタッフと共に集中的に実施しました。スタッフの協力もあり、計画していた内容を実施することができました。5S実施後は、スタッフから手術室は前よりも随分良くなったという声があり、また他部署のスタッフからもそのような声を聞いた時は嬉しかったです。

今後は、改善した環境の維持継続が課題です。問題が生じた時は、解決に向けた話し合いをしています。元に戻るのは一瞬で、簡単なことです。しかし、この変化を感じてもらったことを生かし、次の取り組みへつなげていきたいと考えています。現在は、感染管理の視点から看護技術面の指導に取り組んでいます。

こラオスに来て、いろいろな人に出会い、様々な経験をしています。なにより、自分の思うベストの方法が、ここのベストではないと感じています。ラオスの人々の文化、風習、考え、経済的負担などいろいろな面を総合的に判断して、ここにある資源を最大に利用し、工夫することが必要です。活動がうまくいかないことも時にはありますが、そこから学ぶことも実際は多いです。私は任期が終われば日本に帰ります。しかし、彼らにとってこの病院はおそらく生涯働く環境になります。その点を考慮し、彼らの考えに寄り添いながら、残りの任期を全うしたいと思います。



## ～プロジェクトの栄養は本気の愛情～

### 力丸 徹

独立行政法人国際協力機構 国際協力専門員

#### 《プロフィール》

大学院終了後、研究所勤務を経て1988年に専門員となる。5か国へ栄養専門家として赴任。UCDAVIS国際栄養学客員研究員2年間、大学院客員教授などの歴任。



東京都老人総合研究所に勤務している時に、ガーナ野口研究所プロジェクトの栄養学専門家として派遣されました。この時、本当の栄養不良を病院やフィールドで見ってしまったのです。クワシオコア、マラスムス、ヨード欠乏症、成長阻害、低体重、ビタミンA欠乏。道を歩いている時、大金が落ちているのを見たら絶対に拾うと思うのですが、それと同じです。私はそれを懐に入れてしまいました。それが、国際協力の道を歩む事のきっかけです。低栄養の分野には特に関心を持っていましたので、当然の成り行きだったかと思えます。

これまで運よく様々な海外活動に関わることができました。その中でも特に強烈な印象が残っているのは、イエメンのプロジェクトでしょうか。プロジェクト形成から実施まで関わったので余計にプロジェクトには力が入りました。その時感じたことは、政府や住民が本当に望む活動を支援することで来たこと、そして住民側も日ごろ見せないような努力をしてこちらの要望に反応してきたことです。プロジェクトというものは生き物と同じで誰かが本気で愛情を注がないとうまく育たないものだ確信しました。アラブの春でイエメンのプロジェクトは中断してしまいました。国が再開する時に少しでも関わることができればと思っています。

現在は栄養に関連する研修とか大学での講義などでこれまでの国際栄養分野の経験や情報や知見を関心のある人に伝えるようなことに時間を割いています。自分がこれまでJICAの専門家として蓄積したものをこれから栄養分野で国際協力を志す人に可能な限り伝えていかなければと思っています。少しおごりがありますが、それと同時に、途上国の栄養改善取り組みに足りないものも数多くありますので、それらの幾つかを形づけることができればと思っています。



イエメン母子栄養保健プロジェクトチームのメンバー

# グローバル展開事例のご紹介



## ◆ パラグアイ国際PHC会議(中南米国際フォーラム)

2015年9月24日～25日、実施中の技プロ「プライマリーヘルスケア体制強化プロジェクト」の活動として、中南米諸国9ヶ国の保健医療行政関係者及び中南米地域のJICAプロジェクト関係者等228名がパラグアイに集い、「パラグアイ国際PHC会議」が開催されました。パラグアイ保健大臣からは、プロジェクトが推進する「USF(家族保健ユニット)モデル」の中南米全体への普及に向けた中南米諸国のネットワーク作りについて言及されました。また、中南米各国代表団によりグループディスカッションが行われ、PHC保健人材の育成や緊急リファラルシステム構築、住民参加活動の促進などのテーマについて非常に活発な意見交換がなされました。参加国の満足度とモチベーションも高く、既に次回の会議開催についてエルサルバドルやニカラグアが名乗りを上げています。

## ◆ SUNGG (Scaling Up Nutrition Global Gathering)

2015年10月20～22日の3日間、イタリアミラノでSUN(Scaling Up Nutrition)の年次会合が開催されました。今回は2013年から始まった3回目の年次会合で、途上国、ドナー、民間企業、市民社会から約500名が参加しました。3日間の会議日程では、各国の栄養改善の取り組みの進捗報告、効果的な栄養改善の方法、及びSUNムーブメントの成果と課題等について議論が行われました。新たな共通認識として、政治家の関与や、携帯電話などのIT技術を駆使したアプローチ、現地のビジネスセクターの巻き込みなどが挙げられました。会議参加に加え、GAIN (Global Alliance for Improved Nutrition)やゲイツ財団等とも協議を行い、日本が栄養分野でグローバル展開を進めていくための連携の在り方などについて意見交換しました。

## ◆ 官民連携を通じた途上国の栄養改善事業支援セミナー

2015年11月4日に、栄養改善事業支援プラットフォーム準備作業グループ(内閣官房、外務省、農水省、食品産業センター、味の素、JICAが参加)主催の本邦企業向けセミナーがJICA本部で開催されました。本セミナーは本邦企業に対し来春設立予定の栄養改善事業支援プラットフォームの目指す役割・機能を紹介し、国際栄養の現状・課題の理解を深めてもらうことを目的としました。GAINから「民間企業による栄養改善実現に向けたビジネス展開」の基調講演もあり、ODA事業の活用も含めた海外展開事業形成を考える良い機会になったと考えています。



## ◆ 第9回母子手帳国際会議

2015年9月15～17日、カメルーンのヤウンデにおいて第9回母子手帳国際会議が開催されました。同会議は1998年に東京で第1回を開催後、隔年で開催されているもので、前回のケニアに次いでアフリカでの開催となりました。会議には20カ国約250名が参加、自国における母子手帳の導入・普及展開に関するこれまでの成果と教訓を披露し、他国の実践例から貴重な知見を得る、という「グローバルな学び合い」が活発に行われました。次回会合は2016年11月下旬に東京で開催される予定です。



JICAセッション



戸田部長スピーチ



※保健だより第39号にて「セルビア共和国 国家乳がん対策プロジェクト」について「セルビアの首都ベオグラード市と横浜市が姉妹協定を結ぶ予定である」と記載いたしましたが、正しくは「横浜市がベオグラード市を訪問したことを端緒に大学間での連携等が検討されていることを受けて」です。お詫びして訂正いたします。



保健だよりに関する  
ご意見・ご要望があればこちらまで  
(Mitsunaga.Arimi@jica.go.jp)

次号もお楽しみに！